

# 雑記抄

## ストップ・ザ・限界集落

移植の水稲が株間をせばめ、草木の青葉若葉が深緑の空間をひろげる七月の町は緑風さわやかである。

が、然し、あちこちのニュースなどで「限界集落」という言葉が乱れ飛んでいる昨今にあつては「さわめき風」が浸み込んでくる日々なのでは…。

限界集落とは…最初に提唱した大野晃高知大学名誉教授の限界集落とは

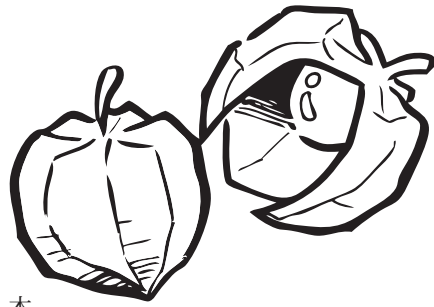
過疎と高齢化によって、集落の自治や冠婚葬祭などの機能が極度に低下し、共同体の機能が限界に達した集落で、65歳以上で50%以上の高齢者が占めるということである。

限界集落の実態：国土交通省の調査（06年4月）では、全国に七八七三のうち、二六四一集落が消滅の恐れがあるとされ、道内（08

年5月）では、五七十か所（全集落の9%）で、住民の半数以上が55歳以上の「十年後の限界集落」はその四倍、全体の三分の一を超えているとされ、道内の場合は二年前の国の調査より二百カ所も一気が増えたとい

うから驚きではある。子供や若者が減り、伝統文化が途絶えたり、山林の管理が困難となつて水害が増加したり、医療や福祉、教育などのいわゆる公的サービスも低下したり、除排雪や買い物など日々の暮らしにも不便を強いられたりして、住みづらい不安な集落が増えてきている。

再生策と支援：限界集落を抱える市町村は百六十カ所の消滅という予測をしている。百を超える古



里が失われる事態であるという。手を拱いては道内の九割の市町村で人口流出が増大するだけでも。早急な対策が必要不可欠であるから、

行政区再編  
広域行政  
支庁再編

の適正な規模と運用等々についての「決め細かい対策」で地域の声を映し出すために、加速化の限界集落をストップする「地域づくり」が展開されなければ…。

かつて、木村尚三郎東大名

者・余所者・旅行者をだいに

するのが真の町づくり・人づくりの基

本である」と進言された。これがベースになつてい

るような渡島管内の福島町千軒地区では「百二十人だからできる地域づくり」に取り組み、「千軒そば」と「殿様街道探訪ウォーク」をつくり出したという。正に「逆境をはね返す地域ぐるみ」の活動である。

集落を「一定の土地に数戸以上の社会的まとまりが形成された、住民生活の基本的な地域単位」とする調査では、「どの範囲を一つの集落と見なすか」は各市町村の判断に任せたので、

町内会単位  
小学校区単位

というような「バラツキ」があつて、大まかな傾向・動向・方向し

「過疎対策」を最優先しないと、

古里の呼び方（道新うそクラブ）昔・長寿村

今・限界集落（札幌・冬扇）となるだけ…。

過密の中央部にあつても、コミ

ユニティの三しき、つまり、

自治知識  
自治意識  
自治組織

（前）中央分館長

尾池隆男